

セッション1 「つなぐ」 支援のあり方とは
南三陸町ネイチャーセンターへの取組報告



草刈清人（ミュージアム・プランナー）

南三陸町ネイチャーセンター

- 志津川ネイチャーセンター、南三陸町自然環境活用センター 呼び方色々だが同じ施設
- 最初、農林水産省の補助事業を活用して設置。様々な事業が試みられたが、時間が経つにつれ利用度は低下
- 平成11年元筑波大学教授の横浜氏を所長に迎え環境教育活動開始
- 走査型電子顕微鏡などの施設整備
- 地方自治体としては先駆的な任期付研究員の制度制定し、博士号を持つ研究員の常駐する施設となり教育、研究の成果をあげる
- 地域資源研究と人材育成、情報発信を活動の柱とする全国的にもまれな町立臨海実験所とも言える施設

地震・津波の影響

センターは屋上まですっぽりと水中に没し、流れ込む大量の水とガレキにより、内部の貴重な資料と機器類は全て消失（復活への提言書 より）

資産の損失		状 況
人的被害		幸い職員、来館者とも全員無事であった。
物的被害	建物	建物の躯体は残ったが修復不能
	設備	電子顕微鏡等の高価な設備を失った。
	標本	800を超える貴重な標本が流された。
金銭的被害	投資額	約3億円
情報の損失	データ	パソコン内に保存していた生物相データベースや海水温の連続観測データ、研究途中のデータが流出し、失われた。
活動停止の損失		
研究活動	継続的研究	志津川湾の生物・環境の継続的な調査・研究が中断し、公表するはずだった地域の価値が埋もれた。
	研究者受入	任期付研究員や外部研究者の受入が滞っている。
教育活動	人材育成	地元小中学校を含め、専門的プログラムの提供が滞っている。
観光振興	教育旅行	講座の提供やメニュー開発機能が滞っている。
	人材育成	地域の指導者・ガイド養成機能が滞っている。

支援の内容と経緯

- ・元NCのスタッフも 生活、水産業の復興対策等で忙しく NCの計画まで手が回らないので、その部分を博物館や自然史の専門家としての経験を踏まえてお手伝い

(経緯)

- ・震災直後 西日本自然史系博物館ネットワークが情報収集したが、標本、施設ともレスキュー可能な状態ではないことを把握
- ・12月15日 高橋氏(中小機構 アドバイザー)より MLに産業振興課(太斎係長)から復興支援要請がある旨の投稿
- ・佐久間氏(学芸員 大阪)、ニシザワ氏(博物館 大阪)、長神氏(准教授、元科学館 仙台)、草刈がプロボノとして参加 別に平井(NPO 沖縄)他参加
- ・1月20日に第一回 現地打ちあわせ。数回現地、メールで検討。
- ・3月17日「フォーラム」現地で開催(NPO海の自然史研究所 主催 約100名参加) ML他で告知に協力、参加
- ・「NC復活への提言」書をまとめ町へ提出。

2012年度の取り組み

- ・5月2日 町長他へ「提言書」を説明。事業を継続を確認
- ・「NC機能復興推進会議(仮称)」で専門的検討を継続
- ・施設整備の為の補助金申請等準備(町)
- ・7月13日 推進会議 と「町民向け座談会(意見交換会)町主催」
- ・秋 環境教育 継続試行
 - ☆体験学習の実施 と 自然調査(海の自然史研)
 - ☆移動博物館(大阪自然史センター)

課題

- NC計画として 細い糸でもつないで行く事
 - ☆NCの 研究の継続発展(環境教育の質維持発展にも不可欠)← 期限付き研究員は中断
 - ☆NCの 自立的、機動的な運営
 - 経営系の専門家の必要性
 - 社会企業など新たな運営体制も視野に
 - ☆漁業者、町民の理解、参画
 - ←NCより、生活の復興が先
 - 環境観光など新たな産業の創出
- プロボノ として いつ撤退
 - ☆プロボノから プロの仕事としての、企画、設計、運営へ